

西洋建築史第6回

戦争の建築－垂直式防御と稜堡式築城術

中島 智章

序.建築家と軍事

- 第1書(都市の防御)と第10書(都市攻撃・防御のための機械)
→「都市を護る建築家」という理想像を示して全書をしめる
←ウイトルウィウスはユリウス・カエサル麾下の軍事技師だったといわれている。

1.垂直式防御

- 都市を囲う市壁(city wall)→交通の要衝に発展した平野の町
+ 防御を優先して山上に築かれた町
アウレリアヌス シタイウォール
Aurelianus帝の城壁(Roma)→廃墟となったインストラや水道橋の構造体を利用した総延長20kmの市壁、30m毎に塔
テオドシウス2世 ローマ
Theodosius II 帝の城壁(Constantinopolis)→堀と塔を備えた二重城壁
コンスタンティノス11世
→Constantinos XI帝治下に陥落(1453)
- カルカゾンヌ、マーストリヒト、アーヘン、ナミュール、バンシュ、トゥルネ、ブリュッセル、メヘレン、ルーヴェン
- 要塞建築→市壁の一面を占める都市防御のための城塞 シタデル
+ 山上など軍事上の要衝に築かれた城塞
主塔: donjon、胸壁: parapet + 矢狭間、城壁(幕壁: courtine, curtain wall) + 塔 + 堀、城門 + 跳ね橋 + 側塔 (=châtelet) クールティーン シヤトレ
10世紀末～: 木造、土盛→切石を積んだ組積造
* 聖堂建設、高度な組積造技術、石材加工技術、十分な石材供給
- フランドル伯居城(ヘント)、ブイヨン城、ルーヴル城、バステューユ城、ヴァンセンヌ城(パリ)
教皇宮殿(アヴィニオン)、スフォルツァ城(ミラノ)、エステ城(フェッラーラ)

2.アヴィニオン教皇宮殿

- 教皇権の絶頂そして転落
グレゴリウス7世対ハインリヒ4世(カノッサの屈辱、1077)
インノケンティウス3世対ジョン・クザン
ボニファティウス8世対フィリップ4世(アナーニ事件、1303)
- アヴィニオン捕囚(1308-77)=教皇のバビロン捕囚
教権に対するフランス国王の影響が高まり、フランス人枢機卿が増加
クレメンス5世(1305-14)→ヨハネス22世(1316-34)→ベネディクトゥス12世(1334-42)→クレメンス6世(1342-52)
→インノケンティウス6世(1352-62)→ウルバヌス5世(1362-70)→グレゴリウス11世(1370-78)
- 教会大分裂(1378-1417)
ローマとアヴィニオンに二人の教皇が並び立つ(1409年からはピサにも教皇が立つ)
- 教皇宮殿(1335～55頃)
中世最大の宮殿建築にして城塞建築
- ゴシック様式の世俗建築への適用
①pointed arch + ②rib vault + ③flying buttress
→世俗建築でも①と②が盛んに用いられた

3. 稜堡式築城術の誕生

- Constantinopolisコンスタンティヌポリスの陥落(1453)
フランス国王Charles VIII, Louis XII, François I^{er}によるイタリア遠征(1494~)←火兵
- 平面: 半月堡(demi-lune)ドゥミ・リュース、稜堡(bastion)バステオン、幕壁(courtine, curtain wall)クールティーンヌ
→「五稜郭」のような角の突き出た多角形平面
→十字砲火、側面射撃を可能にする
- 断面: 斜堤(glacis)グラシ、掩体道(chemin couvert)シュマン・クーヴェール、外岸壁(contrescarpe)コントルスカルプ、堀(fossé)フォセ、内岸壁(escarpe)エスカルプ、胸壁(parapet)
→垂直式防御の「高さ」に対して、稜堡式築城術の「厚み」
→敵側からみたらこんもりとした森にしかみえない
←高い塔や城壁は大砲的にしかない
- 国境地帯の主要都市を中心に、都市は街区よりも広大な面積を要する都市防御施設で護られる
→非常に大がかりなので一握りの大国でしか建設・維持できない
→パルマ、イーペル、リール、ナミュール、リエージュ、ルクセンブルク(リュクサンブール)、ベルフォール
- 軍事計画都市←敵対する勢力間の版図の変化
ex)ピレネー講和条約(1659年11月7日)とシャルルロワ要塞の建設
*パルマ・ノーヴァ、フィリップヴィル、マリアンブール、シャルルロワ、ヌフ・ブリザック

4. 軍事建築の独立

- 中世シャトー(château)=騎士の居館+防御拠点
→近世シャトー=田園地帯における王侯貴族の居館
- 中世シャトーの防御拠点としての側面が独立
→シタデル(citadelle)=都市防御のための拠点要塞
フォルティフィカシオン(fortification)=都市防御システム
フォール(fort)=要塞

5. ヴォーバンの国境戦略

- 「国境線」の出現
←Vaubanの「縄張: pré carré」プレ・カレ戦略と「鉄帯: ceinture de fer」サンチュール・ドゥ・フェール戦略
→都市を結んで防衛線を
ex)北東部国境→イーペル、メネン、リール、トゥルネ、ヴァランシエンヌ、モブージュ、フィリップヴィル、ディナン
サントメール、エール、アラス、ドゥエ、カンブレ、ランドルシー、マリアンブール、ロクロワ
*VAUBAN, Sébastien LE PRESTRE, Marquis de (1633-1707) vs Menno van COEHOORN(1641-1704)
ヴォーバン、本名セバスティアン・ル・プレストル メンノ・ファン・クーホールン
ルイ14世
- Louis XIV治下のパリ非武装化(1670)
→セルウィウスの城壁を撤去したカエサルの大業の再現を狙う

6. 都市防御システムと都市の膨張

- Napoléon I^{er}ナポレオン1世の国民皆兵→国境辺の攻囲戦↓
→パリ再武装=l'enceinte Thiers(1841-1929)、稜堡×94
アンリ・アレクシス・ブリアモン
- Henri-Alexis BRIALMONT(1821-1903)の環状配置要塞群(リエージュ、ナミュール、アントウェルペン)
←火砲の発達